

参考資料

1. 軽度者の状態像の特徴

- ①死亡原因疾患と生活機能低下の原因疾患とは異なる
- ②要介護高齢者の状態像には3つのモデルがある。
- ③要介護度の悪化のプロセスには特徴がある

2. 現行サービスの課題

- ①ケアマネジメントの問題—補完型単品プラン
- ②訪問介護の問題—生活支援(家事援助)中心
- ③通所サービスの問題—集団ケア
- ④福祉用具の問題—状態像との不適合

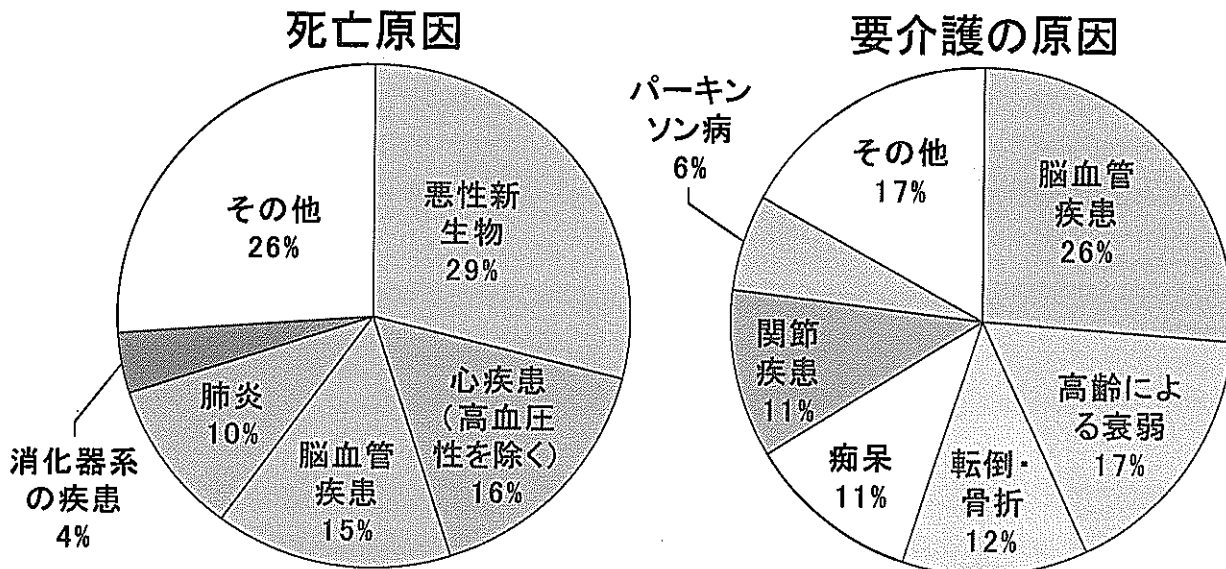
3. 介護予防のエビデンス

1. 軽度者の状態像の特徴

①死亡原因疾患と生活機能低下の原因疾患とは異なる

死亡原因疾患である生活習慣病予防に加えて、今後は、要介護状態の原因となる生活機能低下予防の強化が必要

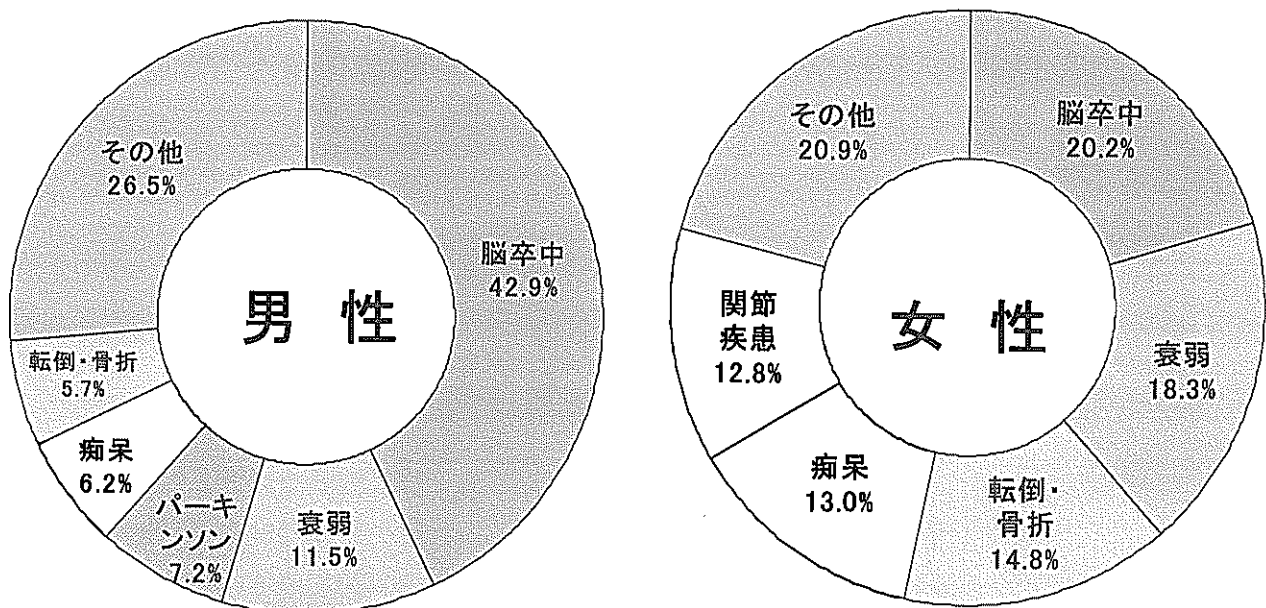
65歳以上の死因と要介護の原疾患



資料:人口動態統計及び国民生活基礎調査(2001年)から65歳以上高齢者について作成

介護が必要となった原因(男女別)

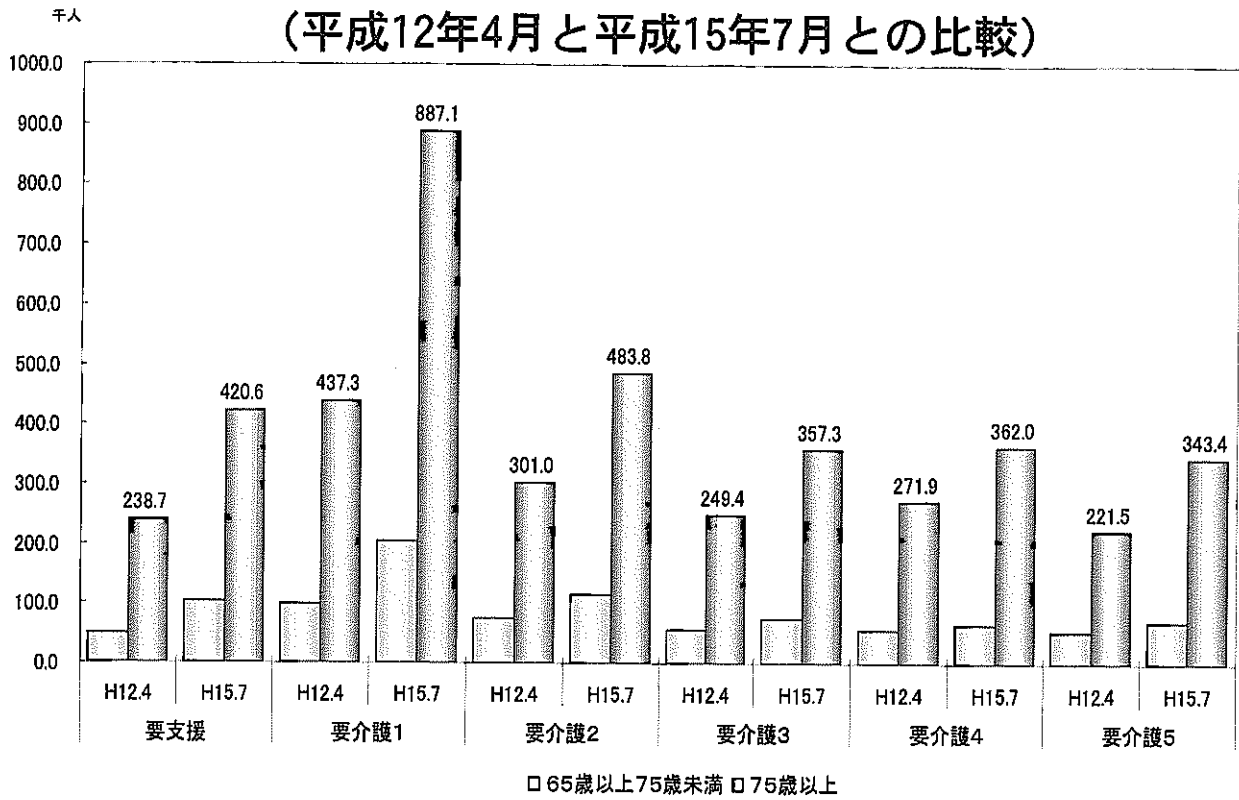
- 男性は脳卒中が約43%。女性原因が多様で、脳卒中以外の衰弱、転倒・骨折、関節疾患を併せた割合は約46%。



資料:厚生労働省「国民生活基礎調査」(2001年)

要介護認定者に占める前期高齢者と後期高齢者数

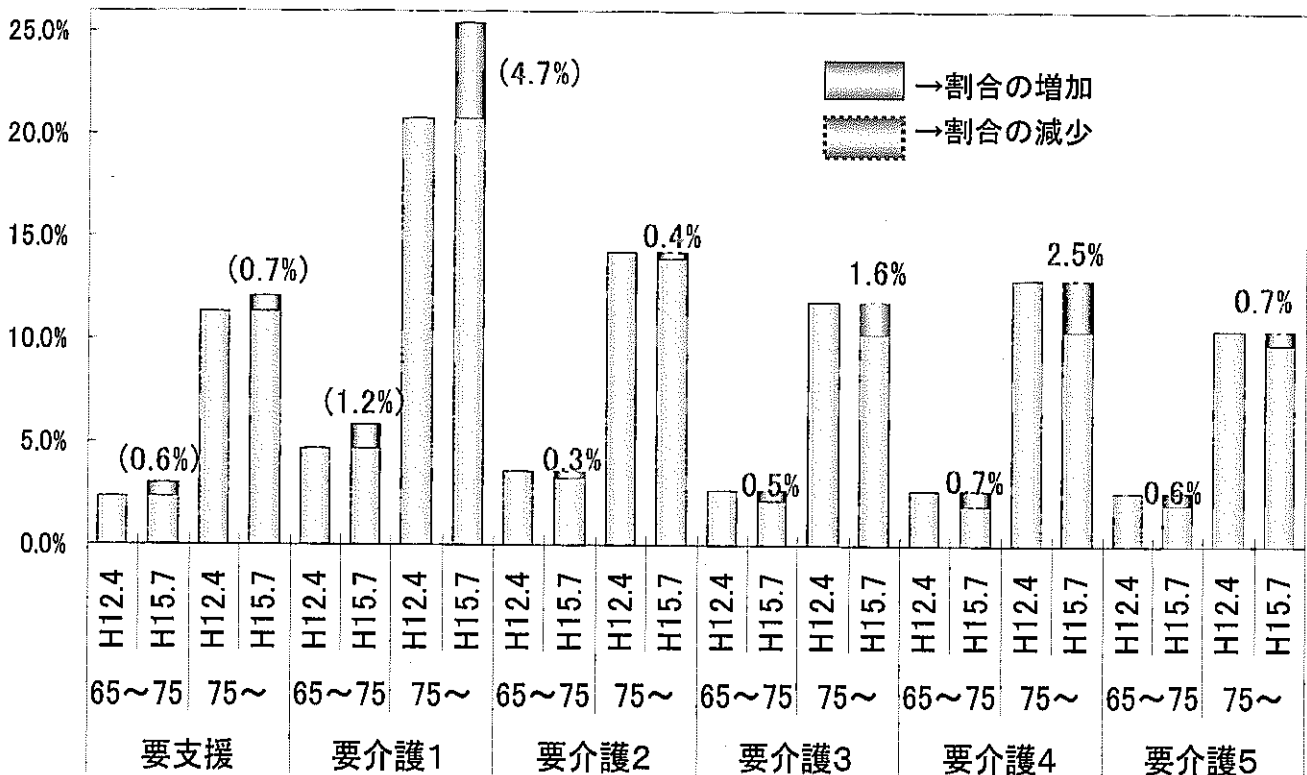
(平成12年4月と平成15年7月との比較)



資料 介護保険事業状況報告(2003年12月9日時点集計)

認定者に占める前期高齢者と後期高齢者の割合の変化

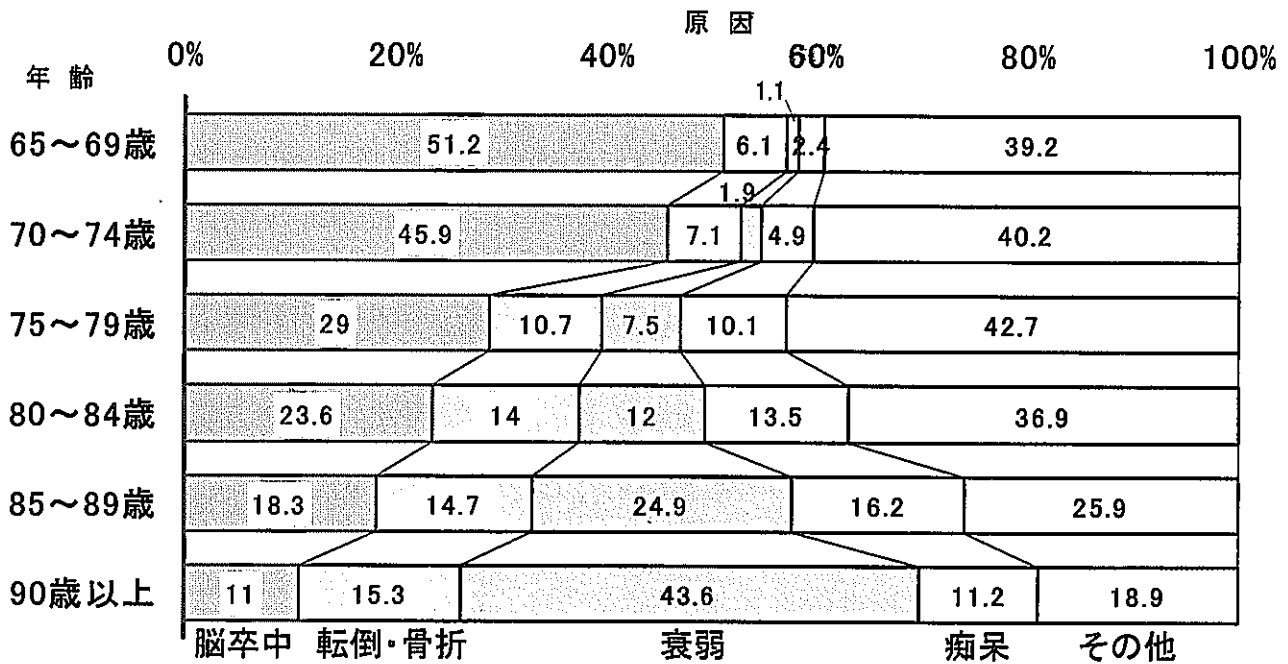
(平成12年4月と平成15年7月との比較)



資料 介護保険事業状況報告(2003年12月9日時点集計)

介護が必要となった主な原因（年齢別）

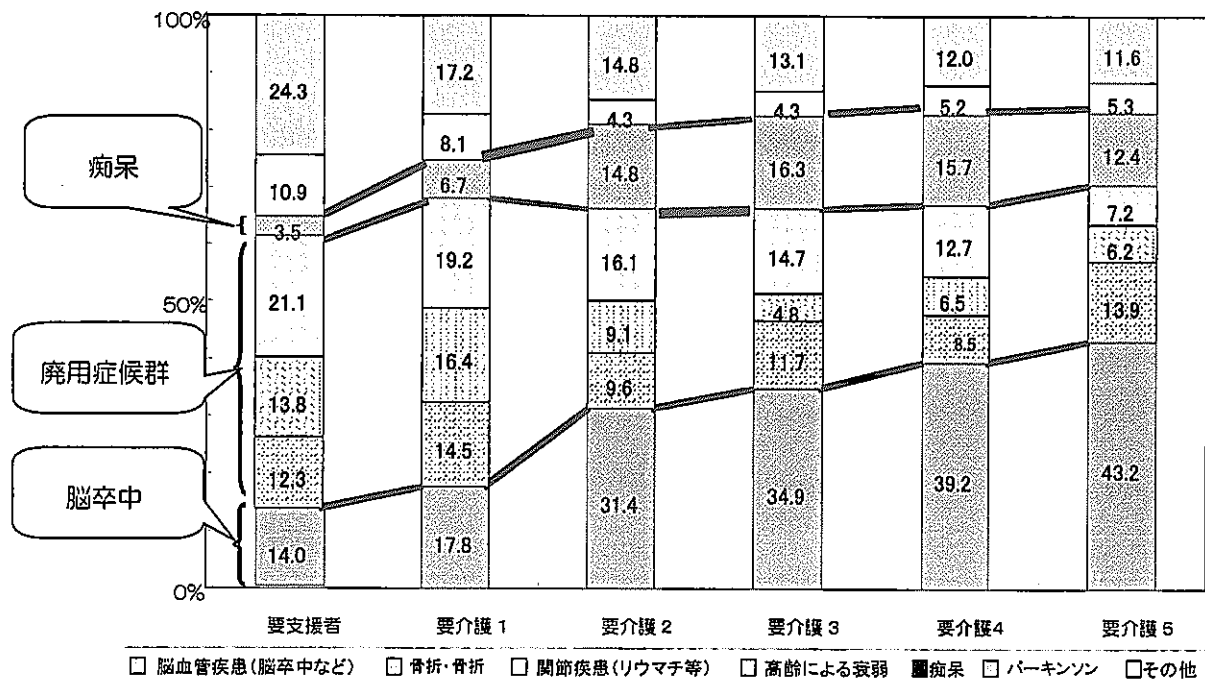
○ 65歳以上75歳未満の前期高齢期は、脳卒中が多いが、75歳以上の後期高齢期は、衰弱、転倒・骨折が多くなっている。



資料 厚生労働省「国民生活基礎調査」(2001年)

要介護度別介護が必要となった原因割合

～軽度の方が原因が多様～



資料 厚生労働省「国民生活基礎調査」(2001年)から厚生労働省老健局老人保健課において特別集計(調査対象者:4,534人)

②要介護高齢者の状態像には3つのモデルがある。

高齢者の状態像に応じたアプローチ

1. 脳卒中モデル

脳卒中等を原因疾患とし、急性に生活機能が低下するタイプ。要介護3以上の中重度者に多い。

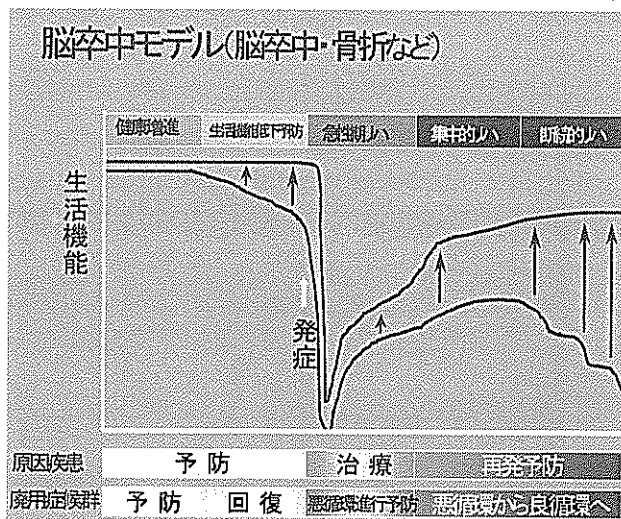
2. 廃用症候群モデル

廃用症候群(生活の不活発さによって生じる心身機能の低下)や変形性骨関節症などのように徐々に生活機能が低下するタイプ。要支援、要介護1等の軽度の者に多い。

3. 痴呆モデル

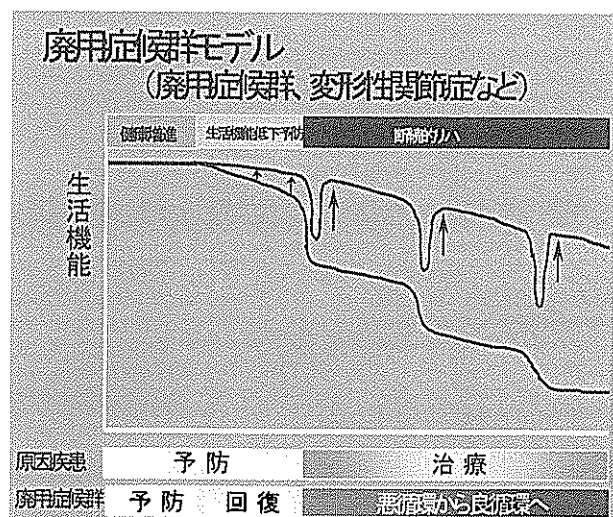
上記に属さない、痴呆などを原因疾患とする要介護者のタイプ。

脳卒中モデルと廃用症候群モデル



発症直後の急性期からリハビリテーションを開始し、その後、自宅復帰を目指して短期的に集中して、リハビリテーションを実施。

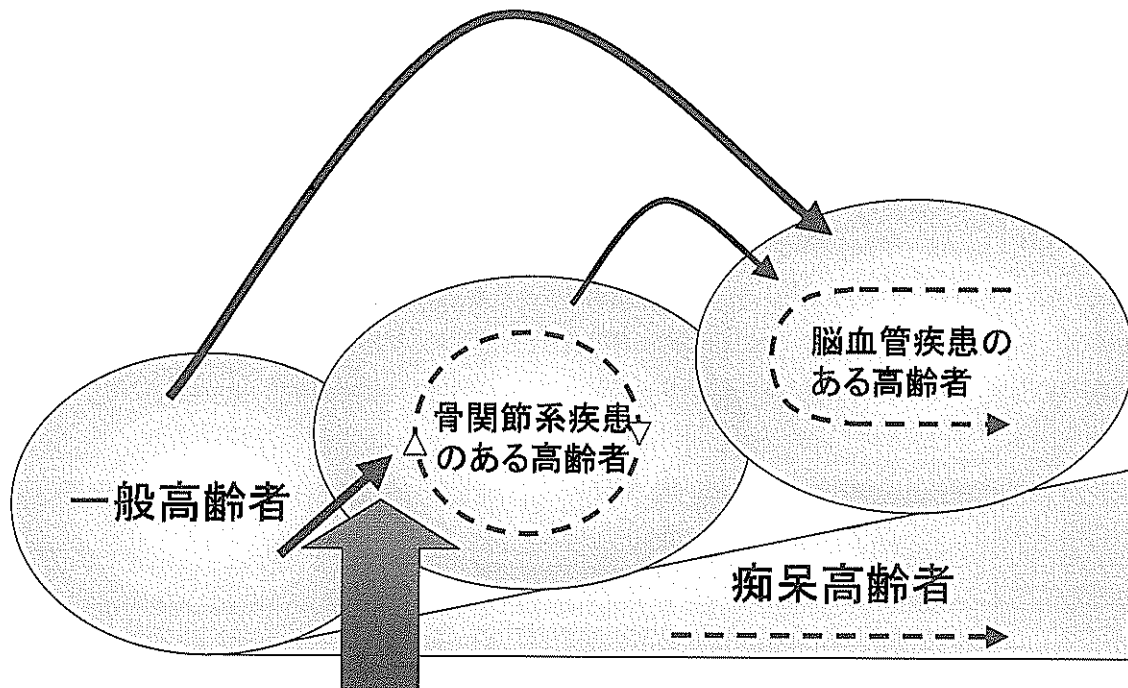
自宅復帰後は、日常的に適切な自己訓練を行い、リハビリテーションの必要な時に、期間を定めて、計画的に提供。



生活機能の低下が軽度である早い時期からリハビリテーションを実施。

リハビリテーションの必要な時に、期間を定めて、計画的に提供。

要介護高齢者を構成する三大グループ



介護予防の最重要ターゲット

(北九州市データより産業医科大 松田晋哉教授作成)